

呪文

霧生 1

出勤時間が始まる少し前の早朝、店を開けるために霧生が表に出たとたん、三軒先の野豆腐店のおばあちゃんが割烹着姿で寄ってきて、「咲紀ちゃん、夜逃げしちゃったよ」と耳打ちした。野瓜さんが言うには、昨晚、店を閉めるときには普段どおりだったが、今朝四時半ごろに野瓜のおじいちゃんが仕込みを始めたとき、咲紀さんの雑貨店「37。21e main」のシャッターが開いたままで、中が空っぽなのを発見したのだという。

「何で夜逃げなんか」

霧生は暗い声で言った。快活でめげない咲紀さんでさえも、こんな手を使わざるをえな

い窮地に追い込まれたという事実には、打ちのめされていた。

「まずいところからお金借りちゃったんだろうね。山水さんすいさんのときもそうだったよ」

ちょうど一年前、ぬいぐるみショップを経営していた山水さんが、闇金に手を出して夜逃げしたのだという。

「咲紀ちゃんにも山水さんの話はしといたんだけどね。あんたも気をつけなさい」

「縁起でもないこと言わないでくださいよ。店つぶれるの、これで九軒目なんですから、ぼくが松保まつほ商店街に来てから」

「いくんちたつたんだっけかね？」

「店の工事始めたときから数えて、半年ちよつとです」

「まだ半年かい。もう何年もいるような顔してるけど」野瓜さんは少し微笑んだ。

「咲紀さんだつて、まだ一年ちよつとつてところですよ」

「そうなのよ。早すぎんよ。若い人がきばつてくれないと、松保のほうが私より早くお陀仏になつちゃうよ」

野瓜さんは口癖になつている文句を、しみじみと実感を込めてつぶやいた。

「咲紀さんはんばりすぎつてぐらい、はんばつてましたよ。それでもつぶれちゃうのは、環境の問題なんじゃないかなあ」

霧生は苦い思いを込めて言う。店が次々とつぶれていくような商店街を、見込みのある場所だと勘違いして、出店してしまつたわけだから。

「そこも若い人ががんばってくれないとつて言つてんの。商店組合みんな考えないと、どうにもならないからね。でも私らなんかの年ごろじゃ、古い頭つきや持つてないからね。見当違いの意見しか出てきやしないよ。凶領ずりょうさんなんかね、ほんとよくやつてるやね。咲紀ちゃんは、凶領さんに相談したんだろうかね？ 相談したら、少なくとも夜逃げなんて真似しなくても済んだんじゃないだろうかね」

「聞いてみますよ。今晚、凶領と飲みに行くんで」

「そうかい。そうやつて若い人たちでね、密に相談してちょうだいな」

霧生は苦笑いを浮かべ、曖昧にうなずいた。凶領と会うのは商店街の活性化について語り合うためではなく、霧生の店の資金繰りの問題を個人的に相談するためだった。まさしく咲紀さんのようにならないために。松保商店組合事務局長の凶領からは、金だとか商店街の人間関係だとか、どんな問題でも恥に思わずに相談してくれ、と言われている。

「今度はどこがつぶれたつて？」

隣の「ゆきた鍼灸院」から湯北ゆきたさんが霜降りゆきふりのジャージ姿で現れた。野瓜のおばあちゃんの声はよく響くので、聞こえたのだろう。

「咲紀ちゃんがさ、夜逃げしちゃったのよお」

「そろまた大胆な。まあ、そろそろかなあとは思ってましたけどね」湯北さんが例によつてさらりと毒舌をふるう。野瓜さんは顔をしかめたが、何も言わなかった。

「みんなそう思ってたくせに。霧生は思わなかった？」

「自分のことで手いっぱいですよ」

「だからこそ、妙な共感を持つて見てたんじゃない？」

凶星ではあった。湯北さんの手にかかるのと、ごまかしがきかない。鍼灸師しんきゅうしに必要な能力なのだろうか、それで繁盛しているのだろうか、などと、関係のないことをとりとめもなく思う。

「私はあの店でよく雑貨買いましたよ。咲紀さんはセンス抜群だからね。うちの施術室にも飾つてあるし。でも私一人が熱心を買うぐらいじゃ、どうにもならないですよね」

「私はよく余ったお豆腐をあげたよ」

「野瓜さんのおかげでばくも食いつないですよ」

「おなか空いちやつた。霧生、トルタ作つてよ」

「いつものやつ？」

「いつものハムとチーズの」

「あ、私もお願い」

「もちろんです。野瓜さんもハムとチーズでいいですか？」

「あなたのお勧めのでもいいよ」

「承りました」

霧生は厨房に入り、鉄板に火を入れる。先ほど焼きあがったばかりのトルタ用自家製パンは、バターを使わず小麦粉にイーストと塩だけ。外は固くて中はふかふかの円盤形のそのパンを二つ、上下にスライスし、内側の柔らかい部分を少しそぎ取る。上下とも外側を下にして鉄板に載せ、軽く焼く。その間に、アボカドを半分に切り、種に包丁の刃元を叩きつけるように刺し、くるっと回して抜き取る。鉄板の半分に油を引き、厚めのハムを載せ、その上にスライスチーズを裂いて重ねる。焼いたパンの内側にマーガリンを塗り、アボカドをスプーンで薄く削ぎ取ってその上に敷き、軽く塩を振り、メキシコ産の酢漬けのハラペーニョを三つずつ置き、レタスを敷き、火の通ったハムととろけているチーズを載せ、コシヨウを振り、スライスしたトマトにみじん切りのタマネギを少し散らし、また軽く塩をし、もう片方のパンで蓋をする。紙ナプキンで三角に包んでその両端を持ち、トルタを宙に放り上げるようにして一回転半させ、キャンディの包み紙のようにくるりとねじると、もう一つも同じように包み、「お待ちどお」と湯北さんと野瓜さんに右手と左手で

同時に差し出す。歌舞伎でいえば見得を切った瞬間。

この間わずか三分。パンに包丁を入れた瞬間からトルタを差し出す結末まで、すべてが完璧でなくてはならない。ウェーブを描くようにうねりに乗って、一センチも一秒も狂いのないダンスを舞うように、あらゆる過程を軽やかにこなし、一回転半させたトルタが手のひらにびたりと収まったとき、手応えが降りてくれば成功。どこかの過程で少しでも狂いがあれば、手応えは降りてこない。ほんの少しハラペーニョの位置が違っていたり、ハムにかすかに火が通りすぎていたり、刻みタマネギの量が三粒だけ多かつたりと、素人目にはわからない狂いでも、霧生には手応えのないトルタになってしまう。精緻な修練の積み重ねが、曰く言いがたい「手応え」という感触として、実を結んでいるのだ。手応えを得られたトルタにはオーラさえ漂っている、霧生は本気で自負している。そしてもちろん、そんなトルタはこのうえなく美味しい。他の具としては、ベーコンエッグ、ミラネサ（ミラノ風カツレツ）、ティンガ（裂いた鶏ムネ肉のチリトマト煮込み）などがあり、自由に組み合わせられる。ミラネサとティンガこそ本場仕込みの自信作なのだが、いかんせん五百九十円と値が張るのと認知されていないのとで、あまり注文はない。ティンガ以外のすべてを盛り込んだ「クバーナ」は九百円と大特価なのだが、これも頼む人はまれだ。

カウンターにひじをつきながら逐一を眺めていた湯北さんは、「このテンポのいい動作

を見てるだけで美味しそうなんだよね」と言つて四百円を置いた。「ほんと、大したもんだ。大道芸見てるみたいだよ」と野瓜のお婆あちゃんも感心し、「はい。あんたも朝ご飯まだだろ？ 私からのおごり」とトルタと代金を霧生に差し戻した。

「いや、いいですよ。食べてくださいよ」

「歯がダメだからね、パンの皮は食べらんないんだよ」

「何だ、策略かあ。ハメられたな。じゃあ遠慮なくいただきます」

霧生は苦笑いを浮かべながら、いつもの儀式を繰り返した。二人の心遣いに心臓がとろける気分を味わいながらも、この援助を生かすきれないで落ちていく自分に嫌悪も感じた。「そうそう、今晚、予約のキャンセルが二件続いちゃったから、霧生、鍼打ってあげようか？」

「ぼくは今晚は図領と約束があるので、野瓜さんを診てあげてください」

「いいんだよ、私はぴんぴん。悪いとこなんてひとつもないんだから。このぶんじゃ百まで生きちやうよ。だから、若い人がぎばらないと、商店街のほうが先にお陀仏になっちゃう」

「野瓜さんならいつでも喜んで診ますからね」湯北さんはあくびをしながら、戻つていった。

野瓜さんは少し間を置いてから、小声で「鍼とかあんまっっていうのは、どのぐらい効くんだろうかね。してもらってる間は気持ちいいけどさ、ほんとに悪いところが根っから治ったことになるんだろうかね」と言った。

「湯北さんで試したらどうですか？ 腕は確かですよ」

「まあ一年足らずであんだけ繁盛してるんだもんね、伊達じゃないんだろうけど。凶領さんよろしくね」

霧生がトルタというメキシコのサンドイッチのスタンド「イーホ・デ・プミータ HIO de PUMITA（ピューマちゃんの息子）」を開店するために、貸店舗の改修工事を始めたのが昨年の九月半ばだった。工事開始から四日後に、まず輸入食材店「柿梨かんなしFAIR」が店を畳んだ。一昨年の春にオープンしたばかりだから、わずか一年半足らずだ。トルタのための食材も協力して仕入れまじょうと、店主の柿梨さんと言いつ合っていたものだから、霧生の落胆も浅くなかった。意気投合しているときの柿梨さんからは、わずかひと月以内に店を終えるようなそぶりは微塵も感じられなかった。けれど、苦戦しているのは誰の目にも一目瞭然ではあった。だからこそ、協力していこうと思ったのに。

その二週間後に消えたのは、商店街の奥にある古い金物屋「鈴木商店」だ。八十代の鈴木さんご夫婦が経営していたが、商品の管理もままならず、まるでがらくたを放置した倉

庫のよう、一見ただけでは営業しているのかも怪しく見えた。鈴木さんはうさんくさい
ダイベロツパーに店舗を売却し、そのお金で松保の隣、すずしろ台駅前に完成したばかり
の豪華な介護付きマンションに夫婦で引っ越していった。ダイベロツパーは傾きかけた木
造の家屋兼店舗を取り壊し、四階建ての鉛筆ビルに建て替え、一階には調剤薬局も手がけ
る大手ドラッグストアを入店させた。怒り狂ったのは、斜め向かいで古くから「葉のフミ
タ」を営んでいる富美田さん夫妻である。「長年仲間として力を合わせて商店街を盛り立
ててきたのに、こんな最後っ屁があるもんかよ」と言っては悔し涙を流し、商店組合の誰
もが、鈴木が売ったのは店じゃなくて魂だと、一緒になつて裏切り者を断罪した。

トルタスタンド開店の日には、ペット用品店「Le Paradis des Chiens」がつぶれた。経営
者の「マダムの羽」は松保商店組合にも加入せず、他の店と協調する姿勢がなかったため、
疎まれていた。二か月前に、店内に犬の糞が落ちていたのを掃除しておらず客が踏んでし
まったという事故が起こつて以来、客がまったく入らなくなったということだった。なの
で、つぶれても同情する者はなかった。

その後も、フレンチ・ビストロ、キッズウエア・ショップ、昔ながらの米屋、洋菓子店、
理容室と、まるで定期的に人身御供にでも取られるかのようにつぶれていった。鈴木商店
と米屋と理容室を除けば、いずれも出店から二年以内だったという。どの店も、最初から

やっていくのは難しいと思っていた、残念だけど運命だ、というような言われ方をした。自分の店も本当はそんな見方をされているのかと思うと、霧生は水の上に立とうとしていくような心もとなさを覚えた。だが、野瓜のおばあちゃんを始め、商店組合の皆は、顔を合わせれば前向きな言葉をかけてくれる。松保を再生させるためには新しい血が必要だ、若い人のアイデアが鍵を握る、と言ってくれる。いいじゃない、メキシコのサンドイッチ？ タコスと違うの？ あたしも食べてみたいよ、そのタルト、っていうやつ、などと盛り上げてくれる。実際、開店からしばらくは、皆、買いに来てくれた。霧生も、サービスですと、曜日ごとにブロックを決め、お昼時にトルタを配った。評判は上々で、これはウケると太鼓判を押してくれる人も少なくなかった。第一段階で最も重要な、地元のお店主たちに受け入れられるというハードルはクリアできたと思っていた。だが、つぶれた店への、冷淡さはおろか喜びまで混じっているような態度を見ると、まだ信用しづらいけないと自分に言い聞かせたくなる。

つぶれた八軒の代わりに新しく開店した店は、六軒だった。三分の一が空き店舗として残っている。実際、商店街全体にじわじわと空き店舗は増えていた。だから霧生が松保に入ってきたときも、ひとまず歓迎はされた。

わずか二十平米のその小さな店舗は、霧生の入る前はオーガニックのジューススタンド

だったが、半年でつぶれた。その前は合い鍵屋でやはり半年の命だった。さらにその前は、焼き菓子屋が一年、手作りプリン専門店が九か月。そしてその前がもともとのタバコ屋で、これはもう半世紀以上。野瓜さんと同世代のご夫婦が二代目として経営していたが、喫煙者の激減で店が立ちゆかなくなり、料理学校を出てファミリーストランの厨房で働いていた息子さんの同僚が、息子さんを誘って強引に自家製高級プリン店を始めたという。高級住宅街でもある夕暮が丘やすすしろ台の住人を当て込んだのだろうが、プリンだけでやっていけるはずがない。これも強引に息子さんの地元のツテをたどって売り込み、ヤクルトみたいに定期宅配も試みたそうだが、あえなくコケて、息子さんの友だちは行方をくらましたという。その借金を清算するために、店舗を土地ごと売りに出し、今の不動産屋が買い上げた。

スタンドの厨房の奥はトイレへの短い廊下があるきりだが、霧生にはよそに住まいを借りる余力はないので、廊下をウナギの寝床として、夜に布団を敷いて寝た。風呂は二日に一度の銭湯、食事は売れ残った食材を使い、知らない土地なので飲みに行く相手もない。そこまで生活費を切り詰めても、生活は苦しくなっていた。儲けどころか、売り上げ自体が、当初の計画を大幅に下回ったままなのだ。素材へのこだわりも捨て、メキシコ特産の裂けるチーズやコリアンダーなどは断念し、具材全体のグレードも落とし、女性向け

とうたつてサイズを小振りにして開店当初は五百円だった単価を百円下げ、営業時間もランチタイムから夜の帰宅時までだったのを朝のラッシュ時に前倒しして朝食の客を狙ったが、客はわずかに増えたものの、利益は変わらない。ハラペーニョは替えがきかないし、あとは売れないティンガやミラネサを諦めてメニューを三種類に絞ればもう少し原価が下げられるが、それではトルタスタンドじゃなくてただのメキシコ風サンドイッチ屋に墮してしまふという思いがあり、踏み切れない。このままでは、あと二か月で運転資金も貯金も底を突いてしまふというところまで、霧生は追いつめられていた。

昨日も、売り上げはたったの一万八百円。二十四人の客が来て、二十七個のトルタを売っただけだ。採算ぎりぎりのラインが、一日五十個、二万円の売り上げである。その半分しか満たしていない。十二時に寝て朝四時半には起き、あとは働き続けているのに、この数字。もう笑うしかない。

霧生がシャッターを開け、店の看板を通りを出していたとき、がらんと空いた「37.21e main」の中をのぞき込んでいる二人組の若者が目に入った。パーカのほうの男の襟足に赤く細長いものが出ており、霧生は毛虫か何かかと思ったが、近づいてみたら赤い糸を地毛と絡めて編んだ細い三つ編みだった。

「そこ、つぶれちゃったんですよ」と霧生は声を掛けた。二人の男は驚いたように霧生を

見、「えー、だって昨日は普通にやってたじゃないですか。ひでえ」と小柄なパーカが言う。鳥の巣様の寝癪頭に安物の黒縁メガネをかけたもう一人は、何も言わずに唾を吐いた。聞けば、昨日の午前で購入したネットレスが現物は瑕モノきずものだったため、新しいのがその日の夕方に入ってくる予定だから、今日ならばいつでも受け取りに来て大丈夫という約束だったそうだ。

「お金は払っちゃったってことですか？」

「そうですよ。完全に詐欺じゃん」

霧生は再び傷ついた。咲紀さんがそんなあこぎなことをするとは思いたくない。そのときは本当にネットレスを渡すつもりだったのが、事情が一変して逃げざるを得なくなったのだ、と信じたい。でも、そんな突然だったら、車を用意して一切合切を持って逃げることなんてできるだろうか？ 人は追いつめられたら、どんな惨めな悪事にも手を染めてしまふのだろうか。自分もそんなことをしないと限らないということか。

霧生の残り少ない自信が、さらさらと音を立てて、自分というザルのような器からこぼれ落ちていく。

霧生 2

図領とは、松保駅を挟んで商店街の反対側にある松保神社で待ち合わせた。駅から延びる表参道沿いに神社の社務所があり、その二階の小さな一室が松保商店組合の社務所になっている。事務局長の図領は自分の店の定休日や休み時間には、しばしばそこに詰めているのだ。

境内の左手奥には、木々が鬱蒼と茂った中に、岩で囲まれた池がある。いつでも暗いので、水も黒く見える。夜のほうが街灯に照らされて明るいぐらいだ。池のほとり、本殿との間には、地を這うような形で左右にうねる、異形の大黒松が目立つ。樹皮が鱗にも似ているため、まるで池から大蛇が飛び出したかと思まごう。樹齢三百年を超えるとされるこの通称「水松様」^{みずまつ}が、この神社のご神木である。水松様の住む池ということで、池も「水松池」と呼ばれる。案外と豊富な水が湧いており、池からは小川が東方向へ流れ出し、本殿の裏を横切り東参道に沿って、神社の外へ延びていく。その松保川は、かつては大雨が降るとあふれてあたり一帯を水浸しにし、エビや小魚や蛇が跳ねたという。北、西、南と

三方の斜面の底に位置する神社自体も水没しやすく、その水害のあった年は弁財天が元気だということ、商売が繁盛すると伝えられていた。今の松保川は水の収容量の大きな暗渠となり、地上は緑道として整備され、夕暮が丘の繁華街と松保神社をつないでいる。

だが、近年のゲリラ豪雨ではその暗渠でも水を収めきれなくなる場合があり、昨年はじつに四十六年ぶりに水が出た。けど松保商店街の景気はよくならなかったのよ、弁財さんも久しぶりすぎて寝ぼけてたのかもしれないね、と野瓜のおばあちゃんは笑って説明してくれた。

木製の鳥居は、もう一本、これはまっすぐ生えていた黒松の大木が台風で倒れたものから造られたそう。貫の部分には、気の遠くなるほど大量の松の葉を集めて編んだ大蛇が絡まっている。その松葉大蛇と木の鳥居とセットで、国の重要文化財に指定されている。

松保商店街のゆるキャラを作るなら、やつぱり蛇だな、松と合体した蛇かな、などと霧生が想像にふけていると、囃領が現れた。

昨年、小ぎれいに改修され、「松保緑道」から「夕暮れの小道」と名づけ変えられた緑道を、夕暮が丘の駅方向へ歩く。囃領の説明によると、「夕暮が丘」という地名も戦後にできたもので、それ以前は「褥村」だったという。

緑道を外れて住宅街の路地に入り込む。瀟洒な一軒家の間にたたずむ、隠れ家ふうのア

ジァ居酒屋。店内は女性客でいっぱいだった。二組のカップルを除けば、男は霧生と図領だけだ。

女性誌のアンケートでは必ず「住んでみたい憧れの街ベスト5」にランクインする夕暮が丘には、おしゃやれで感じのよい飲食店がたくさんある。街全体が商店街といつてもよく、地を這う植物のように先へ先へと伸び続け、住宅街の中にも店が点在している。そうして、隣の駅の松保をも呑み込みつつあるのだ。地元住民の生活の場だった松保商店街に、場違いとも思えるファッショナブルなお店が次々と現れるのは、そんなわけだった。

何よりも、松保は夕暮が丘に比べて地代が安い。憧れの夕暮が丘には店を出せなくても、松保なら何とかなる。同じように、夕暮が丘には高くて住めなくても松保ならかうじて住める、と考えた若い独身女性が徐々に松保に増えてゆき、松保なのに夕暮が丘を名乗るアパートやハイツや小規模マンションが、高齢者の一人暮らしばかりの一軒家の間にはびこっていく。霧生もそんな客と地代に惹かれて、松保を選んだのだった。

それが落とし穴だった。松保商店街の賃料が安いのは、店が定着せずに次々とつぶれていくからだ。そんなこともリサーチせず、漠然とした思い込みで、一世一代の決断を下してしまった。三十代も半ばであり、もう失敗は許されないにもかかわらず。

「まだ始めたばかりでこんな弱気になってたら、それこそ自分から敗北するようなんだ

つてことは、わかっているんだけどさ。やっぱ眠るときなんかにもすぐ不安になったりして、朝まで眠れなかつたりすると、どうしても負けたほうが楽になれるとか考えちゃうんだよね。だって、選択を間違えるような自分なんか信用したら、ほんとに破滅するしかないでしょ。いや、ごめん、選択を間違えたなんて、図領に言っちゃいけないよね。まさに盛り返そうと踏ん張ってるのに」

「わかっているよ。霧生も踏ん張るために、弱音を吐いてるわけだろ。不安が大きいときに一人で抱えてたら、ほんとに文字どおりつぶれるよ。新しい店があつけなくつぶれてくのは、一人で抱えすぎるといいうのもあると思うんだよね。まだこの商店街の中で仲間意識を持ってないでいるもんだから。俺としては、むしろそういう新参の人たちに、もっとざつくばらんに商店組合に相談してほしいんだけどなあ」

「咲紀さんとかは、何も言ってこなかったの？」

図領は首を振り、「あの人は気丈だろ？ 男に弱み見せたらいけないと思ってるタイプだから」と諦めたような口調で言った。

霧生は咲紀さんを擁護したい気持ちに駆られ、「ていうかさ、相談なんかしにくい雰囲気あるよ。だって、つぶれれば、みんな、最初からこうなると思ってたみたいなこと言うでしょ。ああ、いつもの愛想のよさと本心は違うんだって、鈍いぼくだって思うんだか

ら」と言った。

「でもおまえはこうして愚痴ってる」

「図領は別だつて。ぼくと同じよそ者なのに、地元の信用を勝ち取ったパイオニアだから、話せるんだよ」

「そんなこと思ってるの、霧生だけだよ。他に話してくるやつなんかいないし」

「まあぼくは特別ヘタレなんだよね。だからすぐ誰かに頼っちゃう。こいつはうまくいかないだろうなって思われても、当然だよね」

霧生は、ミャンマーの蕎麦焼酎を使ったモヒートを飲みほし、おかわりを頼む。隣の席の二十代の女二人組は、「それは二股だつて。明白に二股だつて。目を覚ましたほうがいいよ」などと話している。

「おまえのその無防備さは、愛されてると思うよ。野瓜のおばあちゃんなんか、おまえにぞっこんじゃないか」

「そうねえ」

野瓜豆腐店は、霧生が不動産屋と契約をした足で近所に挨拶しておこうと思ったとき、最初に訪ねた店だった。できるだけ古い主ぬしのような店がいいと判断し、あたり一帯の住宅の表札に多い「野瓜」の名前の店を選んだのだ。事実、野瓜さんは松保の大地主で、豆腐

屋はおよそ九十年前に野瓜家が松保へ移り住んだときから続けているとのことだった。野瓜のおばあちゃんは、「若い人が踏ん張ってくれないとこの商店街は私より早くお陀仏になっちゃうよ」と例の口癖で大歓迎して、おぼろ豆腐を試食させてくれた。霧生が、甘く香わしい大豆のとろける味に忘我の境地に陥り、「大豆プディングだ」と思わず漏らしたら、野瓜のおばあちゃんは喜んでしまつて、木綿に絹に寄せ豆腐をつかみ取りのようにプラスチック袋に入れて入れて持たせてくれた。次の日には、筆ペンで「大豆プディングの味 甘くいよ」と記し、「大豆プディング」の文字を朱の「◎」で強調した縦長の紙を、商品一覧の下に貼っていた。商店組合の阪辺理事長に挨拶に行つて速やかに入会すると何かとやりやすくなる、とアドバイスしてくれたのも、野瓜のおばあちゃんだ。

「可愛がつてくれるのはわかるけどさ。それと一人前のお店の経営者として信頼してくれることは別でしょ」

「野瓜さんのところも、お子さんたちが後を継がなかったから、あのご夫婦の代で終わりだろ。もうお二人とも八十を超えてるから、店を続けられるのもあと一年とかじゃないかな」

「あの豆腐の味も消えちゃうのかあ」

「おまえ、可愛がられてんだろ。お孫さんの涼世すずよさんは独身だし」

霧生は耳を疑い、反射的に凶領を鋭く見る。

「それって、トルタ屋はつぶれるから、豆腐屋の後継げって意味？」

凶領は間をもたせるように「バイバイバイ」をもう一本頼んだ。

「そんなことは言っつてない。でも商売つてのは、いつだつて最悪のケースに備えておかないと、すぐに行き詰まる。そのための選択肢は多いに越したことはない」

「ぼくは凶領とは違うんだよ」

「俺の成功例から学びたいんじゃないのか」

「全部真似するなんて言っつてない」

凶領は五年前に、女性が一人で一杯飲みながら夕食のとれる品のいい居酒屋「麦ばたけ」を松保商店街の真ん中に開いて、評判となった。酒類の仕入れで、阪辺理事長が経営する商店街の老舗「匠たくみ酒店」に協力してもらい、つきあいを深める中で、阪辺理事長の娘、秋奈あきなと恋仲になり、一昨年に結婚した。そして匠酒店の番頭みたいなことも務めるようになり、商店組合でも若くして事務局長に推されたのだ。昔からの美容室と自転車屋が店を畳もうとしたとき、外部からその店舗を継ぐ者を探し出してきて店を再生させたことで、わけのわからないよそ者に食い荒らされていくのを防いだとして、一息に地域全体の信頼を得たのだった。

「まあ、俺は特殊例だからね。誰にでも真似できることじゃないし、真似すべきでもない。霧生には霧生式のやり方が見つかるよ」言いつぎたと思つたのか、図領なりのフォローをしてきた。

図領の頭が廃業しそうな老舗の後継者問題で占められていることは、霧生も承知している。それでも、「図領もそういう見方をしてるつてのがよくわかつた」と言わないと気が済まなかつた。

「意固地になつたつて問題は解決しないぜ。そんな態度取つてるから、新参者と古参がお互いに冷たい目で見合うようなことになつてるんだよ。ざつくばらんに相談すればいいんだつて。経験者としてのプライドが傷つきさえしなけりゃ、古参たちだつて、ういやつつてな感じで受け入れてくれるんだから」

「だからぼくは相談しようと思つてるんじゃないか」

「ぶつちやけて言えば、運転資金を貸してほしいつて話だろ？」

「そんな身も蓋もない言い方しないでよ。資金を借りる前に、何とか克服できるノウハウがあるなら、そつちを先に聞きたいし」

「そんなノウハウがあつたら、こんなバタバタと倒れることないと思わない？」

「やつぱりそうだよね……。じゃあまあ、融資の話つてことで」

「じつは商店組合で融資部門を準備してる。非営利だから超低金利でね。コンセプトは、金を出す代わりに口も出す。松保をどんなウリのある商店街にしていきたいか、基本的な方向性を決めたら、それに沿う形で営業してもらおうよう、資金とともに指導していく」

「どこまで口出すの」

「商売がうまくいって、商店街が攻勢に転じられるまでは、どこまでも」

「それってつまり、さつき言ってた、店の種類の変更とかもありうるってこと？」

「現状の店ではどうやっても採算が取れないとはつきりすればね。それは当然だろ？ 松保に限らず、商売の基本だろ？」

そう言われてしまうと、霧生にも反論はできない。

「夏ごろにはスタートさせようと思ってる」

「夏！ それまでもたないかも」

「まあ、正式に商店組合の融資受ける気があるなら、それまでうちで個人的に貸してあげてもいい。むろん、無利子でね。これは好意だから」

何だか底なしの罨にはまろうとしているんじゃないかという釈然としない思いと、猛烈な速度で荒廃していく商店街をこの期に及んで復活させようというのならこのぐらい厳しい条件は呑まないと仕方ないのだろうか、という諦めとが霧生の中でせめぎ合う。

「ちよつと考えさして」と霧生は答えた。

「もうこの、意欲だけはあるのに世界観は旧態依然としたまま玉碎していくつていうサイクルは断ち切ろうよ。松保はもう滅亡寸前なんであつて、俺らの試みも失敗したら終わりなんだ。次はないんだよ。だから逆に、リスクなんか恐れないで、思い切り大胆にやる。中途半端な守りの姿勢にちよつとでも引きずられたら、未来はない。そんなのメチャクチャだ、やり過ぎだつて感じるぐらいのことしないと、この負のエネルギーからは逃れられないと思ふよ」

図領は霧生の目を見つめて、熱く語つた。こいつが本気であることは疑い得ないな、と霧生は思った。ただし、本氣つてちよつと怖くもある、とも。

佐熊 1

発注した商品数を間違えたのは、できない後輩、穴山あなやまのミスだった。佐熊竜輝さくまたつきは発注書をチェックしてそのミスに気がついたが、あえてスルーした。穴山のミスにはいつも振り回されっぱなしで、そのつど佐熊が尻ぬぐいするものだから、すっかり慣れっこになつて

しまつて、いい加減な姿勢を改めようとしなさい。もつと痛い目に遭わなければ変わらないのだから、大きなミスを犯して窮地に陥ればいい、と思つたのだ。

だが結果は、チェックを怠つたとして佐熊にすべての責任がかぶせられた。穴山ができないことは最初からわかつているのだから、おまえが未然に防がなくちやならないんだ、と、自分より二歳年下の課長からどやしつけられた。

その後処理で、金曜の夜だというのに、終電ギリギリまで残るハメになつた。当の穴山はもう帰宅したにもかかわらず。

飲み屋で憂さを晴らそうかと思つたが、ネガティブに飲むと後がろくなことにはならないので、ちよつとだけ贅沢に散財してお腹を満たすことにした。それで、以前から目をつけていた自宅近くの商店街で人気の店、「夕飯のとれる居酒屋 麦ばたけ」に入つてみたのだつた。

閉店まで一時間というところで、客は佐熊だけだつた。カウンターの向こうで後片づけをしている若い男が店主だろう、「お帰りなさい！」とさわやかな挨拶で迎えてくれた。佐熊はカウンター席に座り、「とりあえずビールと」と言つてメニューを広げる。うん、なかなか悪くない。

「この、とろろりロールキャベツと胡椒のきいたポテトサラダ」

「すみません、ロールキャベツとポテトサラダは終わっちゃったんです」

「あらあら、残念。うまそうで、すっかり食べる気満々だったのに。……じゃあ、お月さまのようなオムライスと、野菜が温泉ミネストローネ」

「あ、申し訳ございません、そちらもなくなっちゃいました……」

「オムライスもできないの？」

「卵が切れちゃったんですよ」

「何だよそれ。じゃ、うまみのホッケと基本のミックスサラダ。なければ、芯まで柔らかか小アジの南蛮漬け、ミネラルの雨チャプチェ」

「いや、ほんと申し訳ございません……」

「何、全部ないの！ じゃあ何があるのよ？」

「すみません、今日に限って普段の五割増しでお客様がいらつしやって、大半の料理が終わってしまいました」

「そんなこと知ったこっちゃないよ！ おたくの見通しが甘いつてことでしょ。この店はさ、帰り道にちよいと食事もしながら飲めるのがウリなんじゃないの？ 看板に偽りありでしょう！」

「はい、ごもつともです」

「それで、何だったらできるの？」

「チーズ類とか、乾きものになってしまいうんですが」

「俺は飯を食いに来たの。何か飯作りなさいよ。スパゲッティとかないの？ そのぐらいならすぐできるでしょ。ベーコンとバジルのトマトソースとか。よし、それでいこう」

「すみません、そちらは素材がないので、鶏肉とキノコのホワイトソースの Pasta はいかがでしょうか。少々お時間はかかりますが」

「ホワイトソースね、オツケー。腹減ってるんだから、十五分以内にお願いな」

「うーん、がんばってみますが」

「あ、それと何かサービスしてよ。迷惑かけられてるんだから」

「それはもう。グラスワインをおつけいたします」

「じゃあ、赤と白一杯ずつ。ハウスはゴメンだよ、それなりのボトル開けてよ」

まったく今日一日、自分ばかり何でこんな目に遭わにやならんだ、バカにしやがって、と佐熊の腸は煮えくり返る一方である。悪酔いをして悪意を暴走させるのは避けたいと思つて、自分の感情の爆発を抑え、この店を選んだのに、むしろ暴走させろつてことか？ 人の親切を台無しにしてくれるなら、もう知らないよ、したいようにさせてもらうから、後悔しても遅いからな。

そう考えたら、目がカツと熱くなり、火を噴いたように感じた。深呼吸をすると肚が据わり、佐熊はスマートフォンのカメラを立ち上げ、動画撮影を開始し、時計を見るふりをしてカメラを厨房に向け、「ほらもう時間。ブー、ブー。十五分過ぎてるよ、遅い、遅い」と言った。できあがったときには、「二十三分。何考えてるの。俺だつてもっと早く作れるよ？ 素人より遅いつて、プロ失格じゃない？ 見通しは甘いわ、手際は悪いわ、店持つにはまだ早すぎたんじゃないの？」と嫌味を浴びせた。

そして食べ始めるや、「腐ってる」と怒り出した。鶏肉がにおう、牛乳は古くて腐りかけてダマになっている、おまけにワインまで酸化して味が落ちている。店主はプレートのおいをかぎ、ひとさじ食し、素材の残りもチェックしてから、「これはこういう料理です、問題ございません。においは、ソースに一、二滴加えた隠し味のナンプラーのせいじゃないでしょうか」と説明した。

「何だよ、その何チャラーつて」小じやれた店だからつて気取りやがつて。

「魚醬です。魚を発酵させたタイの調味料です。ダマになっているのは、お客様が風味を加えようとして白ワインを垂らした効果かと思われませう。牛乳に冷たいワインを加えると、凝固しますのぞ」と説明した。

佐熊は顔をボルドー色に変色させ、「ワイン垂らす前からダマになつてたんだよ！ 俺

の鼻がおかしいっての？ 俺はこれでもボーイスカウトの子どもたちにキャンプで料理作りを指導してる身なんだから、新鮮さには敏感なんだよ。おたくがいつつも古い食いもん出してるから、おたくの鼻のほうが麻痺しちゃってるんじゃないの？」と、声を次第に荒らげながら言った。

「お客様の感性は信用しておりませんが、私もプロですから、健康に問題を起こすような料理はお出しいたしません。己の判断に自信を持っております。どうぞ安心して召し上がってください」

「何、その上から目線。慇懃無礼ってのはこういうことを言うんだよ。何で素直に客の批判を聞けないかね。においしますよ、間違いない。鶏肉も古いし、スープ自体、醜^すえた酸味が混じってる。死にやあしないかもしれないけどね、いわば、何日も風呂に入ってるないバアと無理くりセックスするような、やるせない気分だよ」

それまで丁寧だった店主が豹変したのは、この瞬間だった。

「失礼しましたね、メニューにもないこんな不味くて不完全な料理、お出しした私が悪うございました。下げましょう、その酸化しているというワインも」

店主は、佐熊が手にしていたワイングラスを強引に奪い、パスタの皿も厨房へ持っていた。そして蛇口からコップに水を入れると、「お口直しにどうぞ」と佐熊の前に置き、

「飲んだらあなたも下がってください。私はあの腐つたとあなたの主張する料理とワインを味わえるお客様を大切にしておりますので、わざわざそんなものを食べに来て文句を言う方にはご縁がありません。お引き取りください。むろん、お代はけっこうです」と通告した。

「何だ、客に対してその態度。何様だよ、あ？ おたく、客商売つてことの意味がまったくわかってない！ こんなバカにした態度とつて、よく店やつてるね。嬉々としてありがたがる客も客だよ、平然と騙されて。バカ同士、つり合ってるつてか？ 俺は泣き寝入りしないよ。精神的苦痛を与えられたんだから、それなりに償ってもらうよ。どんな商売だつて、てめえの過失から客に損害を与えたら、補償するのが筋つてもんだろ」

「だからお代はけっこうです」

「食えもしないもの、払うわけねえだろ！ そんなの補償つて言わねえんだよ！ もつと客の立場に立つて、埋め合わせしなさいよ」

「ゆすりか？ 脅迫の現行犯ですぐ警察に来てもらおう」

電話機のところへ行こうとする店主の腕を、佐熊はつかんだ。

「待てよ。そうやって人の話逸らして、逃げるんじゃないよ。呼ぶのは警察じゃなくて保健所だろ」

「必要なら警察が呼ぶだろ」

脳が破裂するような感覚があり、佐熊の意識は一瞬飛び、気づいたら「ざけんな！」と叫んで店主の胸に頭突きを食らわそうとしていた。店主は間隙でわきに避け、佐熊はあえて大げさに壁に激突した。そして激しく痛みが、「傷害だ！ 暴行だ！」と喚き、テーブルの上の塩の瓶を投げつけ、さらには椅子を振り上げた。自分をコントロールして意図的に暴れているのか、我を忘れて暴走しているのか、自分でも判別がつかない。店主は、佐熊の開いたみぞおちに下からパンチを見舞った。息が止まりそうになり、佐熊はうめいてくずおれる。店主が一一〇番しているのが、かろうじて聞こえる。

警官二人が現れると、佐熊は自分の傷を示しながら、いかがわしい料理を批判したらいかに手ひどい暴行に遭ったか、しつこく説明した。警官がうんざりしているのをわかつていながら、もはや自分でも止められない。店主は笑顔で、顔なじみらしい警官に尋ねられるまま、淡々と答えている。それぞれの言い分を聞き終えると、警官たちは小声で相談したのち、警察が正式に処分するような案件じゃないから、佐熊さんも凶領さんもお互いに寛容になって、仲直りしなさい、と二人に促した。店主は満足げにうなずき、久保田の碧寿（へきしゆ）を一升、佐熊に進呈することでケリをつけようと提案してきた。腹の収まらない佐熊は、一升瓶を受け取りつつ、「これは例外中の例外だからな。普通だったならこんなことじ

や済まされないよ。お巡りさんのメンツを立てて、今日は引っ込むけどよ」と、やくざみ
たいな捨てゼリフを残して店を出た。

しばらく歩いてから振り返ると、店主が店の玄関で塩をまいているのが見えた。店主は
こちらに気づいて微笑み、頭を下げたが、佐熊は無視した。

徹底してつぶす、絶対叩きつぶしてやる、とつぶやきながら、数分後に自分のアパー
トに帰り着くと、佐熊はさっそくブログに上げる文章を、取り憑かれたような勢いで打ち始
めた。

一時間半かけて完成させると、今度は録画したムービーをパソコンに取り込み、ブログ
の文章と合うような形に編集していく。

できあがったらアップロードし、いくつものアカウントを駆使して、あちこちの掲示板
やSNSで拡散する。それらのまとめサイトも作る。さらに、麦ばたけと松保商店街を貶
めるどぎつい文言を記したビラを作って、プリントする。

すべてが完成したのは、夜が明けようかというころだった。足をすくわれるようなミス
をしてないか、いまいちどチェックしながら、佐熊は満たされた気持ちに陶然となる。不
満が破裂せんばかりに高まり、怒りが沸騰すればするほど、同時に佐熊は高揚し集中力が
増すのだった。ネット上の期待に応えてあり余る掘り出しモノのネタを仕込んだという興

奮が、佐熊に巨大な誇りの感情を与える。特に今回は近年でもまれに見る大当たりの予感がある。大きな波が押し寄せるだろう。

佐熊は宣戦布告のつもりで、麦ばたけのホームページに記されているメールアドレス宛に、メインで使っているハンドルネーム「ディスプレイ総統」の名で、自分のブログのURLを貼り付けた次のようなメールを送った。

〈麦ばたけ 御主人殿

今日はゴチソウサンでした。おたくの店、宣伝しておきました。

以下の日記を、私が掛け持ちして持っている複数のブログにアップしておきました。

さらに精進してください。

ディスプレイ

~~~~~

この暴力居酒屋にご注意！

4月25日（土）投稿

今日も私の経験値が上がる出来事があった。人間、日々是修養である。成長する材料には事欠かない。このお店には、私を更に成長させてくれて有難うと感謝したい。

残業で帰宅が深夜零時に近くなったため、自宅近くの松保商店街で目を付けていた、「夕飯のとれる居酒屋 麦ばたけ」に入ってみた。その時間で食べられる処といえ、ラーメンか牛丼、もう飽きていたのである。

成程、繁盛していると評判の店、内装は感じ良く、これ又その内装にマッチした爽やかなマスターが出迎えてくれる。

しかし、好印象だったのは、僅かにそこまで。看板の夕飯を頼もうとしたら、悉く売り切れ。何でも、その日は想定外の数の客が来て、料理が終わってしまったのだと。

これで客商売というから呆れる。リスクに対して何の備えもない。「夕飯のとれることを売りにしているんだしたら、夕飯がなくなつた時点で店を閉めたらどうですか？ それを当てにしてきた客に失礼でしょう」と私は穏やかにアドバイスした。すると店長氏、「そんなことしたら、お酒を当てにしてくる客に失礼です」とのたまつた。素直じゃない。宜しくない。

しかし、ここは抑えて、「折角、当てにしてきたのだから、何か簡単なものを振る舞つてください。早く出来れば何でも構いません」と丁寧頼んだ。店長氏、「仕方ありません

んね。その代わりこちらにお任せしてもらいますよ。メニュー外の特別サービスだから、お代も特別に頂きますよ」と来た。その横柄な態度にムカツと来たが、ここで大人げない言い争いをするより、一刻も早く空腹を満たしたかったので、黙って肯いた。

待つこと、何と半時間以上。詫びの一言もなく、鶏肉が申し訳程度入ったクリームソースのスパゲッティが出てきた。頼みもしないのに、白ワインも添えられて。

その湯気を一息嗅いで、私は店長氏のしたことを察した。酷く臭うのである。空腹のはずなのに、私の胸はうっとなって戻しそうになった。恐らく、古くなって捨てるはずだった冷凍の鶏肉とクリームソースをレンジで解凍し、それを誤魔化すためにあれこれ加えて試して、時間が掛かったのだろう。その証拠に、ワインを入れたために出来たと覚しき牛乳の粒々が大量に浮かんでいる。

一匙だけ口に入れるのが精一杯だった。有機物の腐敗臭が鼻を突き、苦味の混じった酸味が舌を突く。口直しをしたくてワインを含んだら、これまた鉄錆びのような味。流石に私も我慢ならず、料理が饅え、ワインが酸化している旨を指摘した。店長氏の言い訳は、隠し味に腐った魚汁を入れてるだの、この店の常連はこの味が分かるだの。私が、「お客さん相手にこんな代物を出すような舐めた態度を取っていると、いつか自分に跳ね返ってきますよ」と忠告したら、突然逆ギレ。他の客がいらないのを幸いとばかり、「クレームを

付けて只食いしうって魂胆だろう、カネ払うまでは返さないからな」と私の襟首を絞め上げる始末。私が「警察を呼びますよ」と忠告すると、私の顔や腹を殴るだけ殴った挙げ句に、自ら一〇番したのには啞然としました。この訳の分からない男の理不尽な暴力に、死ぬ程の恐怖を味わいました。

普通なら墓穴を掘る所なのですが、現れたのはこの商店街を管轄にしているオマワリ氏。店長氏とニヤニヤ目配せをし合う仲で、私は悪い予感がしました。案の定、私は唯のクレーマー扱いされ、暴力のことはなかったことにされ、穩便に済ませてあげるから、ここはもう帰りなさい、代金はチャラということで話はつけたから、とオマワリ氏に促されては、一市民の私にはどうにも出来ません。

こうして何人の客を泣き寝入りさせてきたのでしょうか。全く客を舐めるにも程がある。世の中を舐め過ぎである。夕暮が丘の近くだからって、雰囲気だけお洒落っぽくすれば人は寄ってくるだろう、見てくれだけ小金をかけて料理は手を抜いても分かるまいなどという店は、すぐ潰れる。事実、この商店街はそんな店ばかりが集まってきては、次々に潰れて入れ替わっていく、実に浮ついて墮落した場所なのだ。

全く今の世はニセモノばかりだ。こんな詐欺紛いのぼったくり遊園地みたいな居酒屋が、大きなツラをして、寂れていく商店街を乗っ取ろうとしている。嘆かわしい、実に嘆かわ

し。

お陰で私には、ニセモノを見抜く目が更に一つ備わったという次第だ。

皆さんも、こんな暴力詐欺居酒屋には引つ掛からないように、ご注意ください。

デー々

店名…夕飯のとれる居酒屋 麦ばたけ (店長・凶領幸吉)

住所…東京都城南区松保3-6-17 (↓地図)

電話番号…03-876B-765F

メールアドレス…feldofdreams6183@pineguardmail.com

いち「麦ばたけ」ファン

シャワーを浴びてから、ネット上にまき散らした文章への反応をチェックする。自分の行動を期待しているネットの民たちが、思ったとおりに燃え始めてくれている。アカウントをめまぐるしく替えながらそれらを煽る書き込みをすると、ようやく気持ちが落ち着いて、佐熊は眠りにつくことができた。

## 栗木田 1

図領さんから栗木田康介くりきだこうすけにLINEで連絡が来たのは、白河肇しろかわはじめと路上飲みしているときだった。

「まもなくうちの店から出てくる男をつけてくれ。手入れすればそれなりのイケメンになれるのに、してないがためにダサさの極致にある四十前後のスーツ男。見ればすぐわかる」という用件だった。栗木田は自分の求められていることをすべて了解した。

麦ばたけの前で待ち伏せしていると、すぐにそれらしき男が出てきた。濃いめの顔立ちなのにおかっぱにしているのは、どんな考えあつてのことだろう。

男の態度は尋常ではなかった。茹でたような色をして、ときおり何か吐き捨てるような勢いで独り言をつぶやいている。男は商店街を松保四丁目のほうへ曲がった。三ブロック行つて南八通りなんぱちにぶつかる手前のアパートに入っていく。一階の奥から二つ目の部屋だった。少し間を置いてから栗木田は近寄って表札を見る。何も書いていない。栗木田はあたりにも誰もいないことを確かめると、かがみこんで、扉の下方の隅に目立たないよう小さく、

油性マジックで「□」の印を描いた。

ミッションが完了したことをLINEで報告すると、栗木田は自分のねぐらに帰った。部屋をシェアしている犬伏猷いぬげけんが、今日も眠れない、とぼやいた。仕方なく、栗木田はこの日もいつもの会話を繰り返した。それはひたすら犬伏を否定し罵倒しまくるといったものだった。

最初は、犬伏が毎晩、自分の先行きをあまりに悲観的に嘆くので、いい加減にイライラして、おまえはどうしようもない人間のクズだと否定したのだった。そうしたら止まらなくなり、いわば犬伏を言葉で殴り殺すかのようになってしまった。犬伏はひどく傷つきすすり泣いていたが、その嗚咽の合間に、俺は何で栗ちゃんがこんな苛烈に俺のこと罵るのか、ほんとはわかっているんだ、俺がほんとに最低のクズだからってこともあるけど、じつは栗ちゃんも自分自身のことを罵っているんだ、俺に言ったことはそっくりそのまま、栗ちゃんにも当てはまるってこと、俺はわかっているよ、栗ちゃんは自分にそんなこと言えないし、言ったらクズの自分を認めることになるから、絶対言わない代わりに、俺に言っているんだよ、俺は栗ちゃんのためにこの罵倒を甘んじて受け入れるよ、クズだと認めるのも悪くないってこと、こうして実例として栗ちゃんに見せつけてやる、と言った。犬伏の指摘はあまりにも正しく、栗木田の心に突き刺さった。以来、栗木田は己を忘れないために、



しょっちゅう犬伏を罵り倒すのだ。そして日常化の必然として、それはひたすらエスカレートしていった。

ともに深く傷つき、しかし得がたい解放感も覚えながら、疲労の極限でようやく明け方に寝入る。単発のアルバイトをする以外無職の二人には、時間の縛りはないのだった。

昼下がりになって目を覚ますと、また凶領さんからLINEにメッセージが入っていた。昨日の男が早くも報復に出ている、商店組合の店にも影響が及んでいるという。本名は佐熊で、ネット上では「デイスラー総統」という名で悪意をまき散らし、狙った人物を平穩な生活から突き落とすまで徹底的に貶めることで有名な存在らしいということで、昨日の一件を暴露した佐熊のブログのURLが添付してあった。

栗木田はデイスラー総統がらみの情報をネットで調べてから、商店組合の事務所に行つた。麦ばたけの休み時間に来ている凶領さんが、電話で受け答えしている。内容からして、まさしくデイスラー総統のブログを読んでの便乗バッシングだった。

「さつきからずつとこんなありさまでさ」と、ようやく電話から解放された凶領さんが呆れ顔をしたとたん、また呼び出し音が鳴り始めた。

「いい、もうほつとこう」

「俺が電話番しときましようか」

「いい。キリがない。店にいてもこの調子なんで、電話回線抜いちゃった」

図領さんは、他の店にも、おたくの商店街はこんな暴力店を野放しにしておくのか等、いちやもんの苦情電話がいくつか来ていると説明した。

「こういう連中は構ってほしただけなんだろうから、無視してるのが一番いいのかな」

「いや、実力行使してくるっていうか、そうしたくてうずうずしてる連中を暗に刺激してけしかけてるみたいなんで、無視してると無抵抗だと見なして過激化してくる可能性もあると思いますよ。これは見ました？」

栗木田はYouTubeの動画を開いた。それはデイスラーが「腐ってる」とクレームをつけてから帰るまでを隠し撮りしたもので、都合の悪い場面は巧妙に編集され、どう見ても図領さんのほうが悪質に感じられるようにできている。視聴数は半日ですでに一万を超えている。

眉をひそめて顎のヒゲをしきりにいじりながら見ていた図領さんは、動画が終わると何度もうなずき、「どうしたら効果的だと思う？」と尋ねた。

「ブログで反論して、デイスラーが文章ばらまいてるところにばらまき返したらどうでしょう。ばらまくのはカジーニョに頼んでみます」

「なるほど」

図領が文章を書いている間、栗木田は犬伏と白河を呼び出して、商店街を見回った。明らかに、いつもの土曜日の午後よりも人通りが少なかった。ネットだけの影響がこんなにすぐに出るはずがないと言いついていたら、その理由を発見した。ジャイアンツのメガホンと金属バットを持って、暴力居酒屋、悪徳商店街に気をつけましょう、皆さん、騙されたり殴られたりするので、この地域には立ち入らないようにしましょう、と叫んで練り歩いている三人組がいたのだ。白河を松保神社交番に走らせて、村井巡査を連れてくる。警官の姿を認めると、三人はばらばらに逃げていった。

他にも、麦ばたけや商店街の写真をこそと撮っている者もいた。図領さんのところには、駅でこんなピラを渡され、ここは危険だから警察も警戒してるんですよ、悪いことは言わないから、隣の夕暮が丘に行つたほうがいいですよ、と忠告された、と、商店組合の家族が教えに来たそうだ。

夕方には図領さんの文章はできあがり、図領さんが店に戻ると入れ替わりに、栗木田とカジーニョこと梶賀<sup>かじか</sup>が、商店組合のパソコンを借りてアップロードの作業をした。

## 宮門 1

クリーニング店「エレガンス」の宮門常安みやかどつねやすが、蕎麦処「滝乃庵」の滝鼻たきはなさんから、「麦ばたけ騒動」のおかげで商売上がったたりだつていうぼやきがあちこちで上がつてゐるらしい、うちも今日はお前以外さっぱりだよ、と電話があつたのは、もう夜七時を回つた夕飯時だつた。滝鼻さんから騒動の顛末を聞いて、それなら麦ばたけに食べに行きがてら凶領の様子をうかがつてしようと、やもめ暮らしの身軽さを活かして宮門は出向いてみる。

宮門の顔を見るなり、凶領は「あ、副理事長。この度は私の不徳のいたすところで、商店組合にすっかりご迷惑をおかけしてすみません」と頭を下げたのだから、やましいと同時に、やがて宮門が小言を言いに来ると踏んでいたのである。宮門は、「何でもっと早く報告してくれないの。今さつき滝鼻さんから聞いたばっかりで、恥掻いちゃつたじゃない。理事長には伝えた？」と、期待に込めてあげた。凶領の義理の父である阪辺理事長にはいち早く知らせていることなどわかつてるので、嫌味として言ったのだ。

「はい。明日の定例理事会で経緯を皆に説明するように言われました」

「明日じゃちよつと遅いぐらいだよね。この、エビひしめくパエリヤ風ピラフ、つていうのをもらおうか」

「ありがとうございます」

「この店も、食事時だつてのに人っ子一人いないねえ」

「ほとほと参つてます。こうですから」

凶領は一枚のピラを見せた。「暴力居酒屋に気をつけよう！」と大きく書かれ、近ごろ詐欺まがいの居酒屋が増えている、危険ドラッグを混ぜたお酒を飲ませて、意識が混濁しているときにぼつたぐつたり紙幣を抜き取つたり、わざと事件事故を起こさせたりする、その一例として昨晚「麦ばたけ」で……云々と説明され、警官が厳しい目つきで凶領に事情を聞いている写真も印刷されている。

「こりゃあ質たちが悪いね」

「駅の改札出たところで配つてたそうです」

「だけど、こんな目に遭つてお気の毒だとは思うけどさ、もうちよつと穏便な対処のしようがあつたんじやないの？ 警察呼ぶなんてことするから、相手も収まりがつかなくなつたつていうかさ。店がトラブルに巻き込まれたら、どのみち商店街には迷惑かかるんだし、わざわざ火に油注ぐような真似しなくてもねえ。ましてあんな質の悪そうなの、凶領君な

ら一目見ればわかるでしょう」

「質の悪いのに捕まったのはぼくの責任もクソありませんが、その対応については、確かに甘かったかもしれない。後手には回りましたが、しつかりと対処させてもらいます」

「事務局長も商店街活性化のためにいろいろ革新的なアイデア打ち出してるけどさ、肝心の自分の店が足引つ張つちや、笑えないよね」そう言つて宮門は大声で笑つた。

「いや、もう、まったく副理事長のおっしゃるとおりで、面目ないです」

「派手に人目を引いてお客さんに来てもらおうつて発想ももちろん大事だけど、地道さも忘れちゃいかんでしょう。ぼくら古い連中はそうやってきたわけだし」

「ごもつともです」

「ま、しばらくは変なやつらを刺激しないように、おとなしくね」

「重々、承知しております」

今度ばかりはそうとう懲りただろう、と確認できて宮門も上機嫌になり、同情の念が湧いたので、お勧めのワインを奮発して注文してあげた。

それなのに、凶領はあつさりと宮門の忠告を無視した。まあ、最初から聞く気もなかつ

たのだろう。宮門とて、凶領がそんなしおらしいタマだとは思っていなかったが、やはりこども堂々と裏切られると、愚弄されたという怒りで体が震えてくる。

翌日曜日の定例理事会は、午前十時始まりだった。宮門が十分前に集會室に入ると、すでに来ていた鮮魚「魚館」の館沢弘務たてざわひろむが、宮門にプリントアウトした紙を見せてきた。館沢の三代目でまだ三十代の弘務は、パソコンとかITに強いため、宮門や滝鼻さんの情報担当として何かと使えるのだ。

「今朝、事務局長が新しく開設したたてのブログです。凶領さん個人のブログで、商店組合とは一応は無関係ということになってます。この会議の前に一応目を通しておかれたほうがいいと思って、急いで印字してきました」

館沢は息をするような小声で、宮門だけに聞こえるように言った。店ではあんなによく響く大声なのに、どうやってこんな技を身につけたのか、宮門はいつも不思議に思う。

「若たっちゃんはどうやって知ったのよ？」

宮門にとっては引退した二代目館沢が「たっちゃん」なので、息子をこう呼んでいる。

「例のエージェント経由で」と館沢は笑いながら言った。館沢は、凶領の妻である旧姓阪辺秋奈と、区立の松保小、松保中で同級生であり、館沢の妻の旧姓三住結子すみゆうこは秋奈の親友なのだ。

「結子ちゃんのほうが若たつちゃんよりできがいいや」と宮門も笑い、手渡されたブログのプリントに目を落としたとたん、怒髪天を衝きそうになった。

〈4月26日（日）

「夕飯のとれる居酒屋 麦ばたけ」は、暴力居酒屋でも詐欺まがいでもありません。

私は浜急春夏線、松保駅の松保商店街に店を構える、居酒屋「麦ばたけ」の主人、凶領（ずりょう）と申します。この名前でピンとくる方は、おそらく「ディスラー総統」氏がインターネット上で公開している、「麦ばたけ」批判の文章をすでにお読みのことでしょう（↓コチラ）。

私としては、ディスラー総統氏の文章には「批判」という言葉は当てはまらず、「誹謗中傷」と呼びたい気持ちです。氏の文章が公開されてから、私の店はおろか、松保商店街までお客さんが激減してしまいました。謂れない中傷で被害に遭ったので、松保商店組合としては訴訟を検討しているところでございます。

誹謗中傷と言いたい理由は、ディスラー総統氏が事実をねじ曲げ、私の店を故意におとしめて書いているからです。皆様にご判断いただくため、私の体験した事実を、できるか



ぎり客観的に記そうと思います。

ディスラー総統氏が深夜零時過ぎ、閉店間際に入ってこられたとき、料理がほとんど終わっていたことは事実です。予測を上回るお客さんがあったことは私の見通しが不足していたせいだというのも、その通りです。これらの点については、私の至らぬところとして大いに反省しております。

夕飯のとれることをうたっている以上、何か食事を提供すべきだというディスラー総統氏のご指導のもと、私はそのとき手もとにあった食材から、鶏肉とキノコのホワイトソースパスタを提供いたしました。「料理が切れたら閉店すべきだ」とか、「閉めたらお酒を当てるにしてくる客に失礼だ」といったやり取りはございません。ましてや、「仕方ありませんね。その代わりこちらにお任せしてもらいますよ。メニュー外の特別サービスだから、お代も特別に頂きますよ」などと申し上げてもいけません。逆に、ディスラー総統氏の「迷惑かけられたんだから何かサービスしてほしい」との言葉に、ごもっともだと思い、グラスワインをお付けすることを申し出ました。ディスラー総統氏は、「じゃあ赤と白。ハウスじゃなくてそれなりのボトルのね」と二杯をご所望になりました。「頼みもしない白ワイン」を提供したりはしておりません。

ディスラー総統氏が十五分以内に作るように要望されたため、ところどころをはしより、

火力を強くしてタマネギやキノコを炒める時間も短くし、超高速で調理いたしました。が、デイスラー総統氏は途中で「ほらもう時間。ブー、ブー、遅い、遅い」と催促なさいます。肝心なところの手を抜くわけにはいきませんので、焦らないでソースを作りきってから持つていくと、「二十三分もかかった。俺だってもっと早く作れる。プロ失格だ。見通しは甘い、手際は悪い。店なんか持てる身分か」とお叱りを受けました。

デイスラー総統氏は、「一口食べるやいなや、「腐っている」とおっしゃいました。におうし、ソースに牛乳のダマが浮いている、ワインも酸化しているというのです。鶏肉とキノコはその日に通常のルートで仕入れた新鮮なもので、他の料理にも使いましたし、調理直前に傷みがないかの確認も怠りませんでした。ワインも、ワインセラーによって嚴重に品質管理しております。私が料理を確かめたところ、においては隠し味として二滴ほど垂らしたナンプラーによるもの（魚を発酵させた調味料だ）と説明申し上げましたが、デイスラー総統氏はブログで「腐った魚汁」と表現されました。ダマはおそらくデイスラー総統氏がソースに独自に白ワインを垂らしたことによるものと確認いたしました。白ワインのグラスの外側に滴がしたたった跡があつて、テーブルクロスを少し濡らしていました。ご存知のとおり、牛乳に冷たいワインを混ぜると、酸によりダマになります。デイスラー総統氏のご自身で料理をアレンジされようとして、ワインを注いだのだと拝察します。

氏はワインと牛乳の相性の悪さをそれまでご存知なかったようで、私の指摘に激怒されたのでした。この点は、確かに客商売を営む者として、反省すべき点だと自覚しております。こちらは専門家、お客様は一般の方、事実をズバリと指摘してお客様に恥をかかせるような真似は慎むべきで、未熟の限りでございます。

しかし、お客様は当店の料理についてその後、非常に下品な表現で卑しめたのでした。私にもプロの料理人としての矜恃がありますから、言われたまままでいるわけにはまいりません。そんな言い方をするほどお口に合わないのなら、食べていただくかなくてけっこうです、お代はいただきますからお引き取りください、ということを申し上げました。間違っても、「クレームを付けて只食いしようって魂胆だろう、カネ払うまでは返さないからな」と言つて襟首を絞め上げるような真似はいたしておりません。代金を払わないのは当然だ、それ以上に補償しろと要求されたのは、ディスラー総統氏のほうでございます。

こういうとき、日本のお店は、お客様にめっぽう弱い。強く反論すると逆に店の評判が悪くなるんじゃないかと恐れて、穩便にことを収めようとする。理不尽なまでに暴力的で威圧的な罵倒や要求を突きつけられながら、ぺこぺこ頭を下げ、「すみません、すみません、それは勘弁してください」などと、お詫びともとれるような卑屈な態度でやり過ぎそうとする。

だから、つけ上がるのです。クレマーを許すからエスカレートするし、クレマーが増えるのです。評判が悪くなることを恐れて、暴力を許していいんですか？ そうやって暴力と不正がはびこることに加担するんですか？ 私は嫌です。たとえお客様であっても暴力団様であっても、間違った態度で無理難題を突きつけてきたときには、きちんと反論をすればいいのです。それがプロの商売人としての責任です。

ストレスが飽和して苛立ち、今すぐ誰かを叩きのめしたいという衝動に駆られている人たちは、潜在的にたくさんいることでしょう。店員だとか駅員だとかであれば、叩いても反撃してやることはなく、ことを無難に収めようと小さくなるばかりなものだから、叩きやすい。叩き甲斐もある。誰かがそういう行為に及んでいる場面も、しばしば目にする。だったら、自分もやっただって問題にはならないだろう、やらなきゃ損ソン、なっちゃいない店員や駅員をガツンと教育してやるだけだから、むしろ善行だ、という意識が、普通の人々の間に浸透していくのです。

これに歯止めをかけるのは、間違ったことは許さないという態度です。ディスラー大統領氏の行為は、明らかに度を越していました。だから私のはつきりと「あなたの態度はゆすりですよ。脅迫の現行犯ですよ。だから警察を呼びます」と告げて、電話機を手にしたのです。

すると慌てたディスラー総統氏は、私を止めようと、私の胸めがけて頭突きを食らわしてきました。私はよけました。激高したディスラー総統氏は調味料の瓶を投げつけ、さらに椅子まで振り上げます。仕方なく、私はディスラー総統氏のみぞおちを突いて、へたり込ませました。そして警察呼びました。これ以上の暴力沙汰は、店にもディスラー総統氏にもシャレにならない事態をもたらすだけなので、最小限の暴力で大きな暴力ヘヒートアップするのを止めたわけです。

駆けつけた二人が顔なじみの松保神社交番の巡査だったことは確かです。私は松保商店組合の事務局長ですから、しばしばやり取りすることもあり、一定の信頼関係を築いております。ですから、ああよかった、私のことをよくわかつている警官だからおかしな誤解は生じないだろうと、ホッとしたのも事実です。実際、お二人の巡査は、ディスラー総統氏の言い分は誇張されていて、警察が関わるような話ではないと判断してくださいました。そして、警官のアドバイスに従い、私はご迷惑をおかけしたお詫びとして、ディスラー総統氏に久保田の碧寿一升瓶をお渡しし、ディスラー総統氏も不満げながら、了解してお帰りになったはずでした。

ところが、翌日、あのような誹謗中傷を文章とし、隠し撮りしていた動画まで都合よく編集して、公開したわけです。そもそも、クレームをつけ始めるところから動画を撮ると

いう行動が、意図的な印象を与えはしないでしょうか？ 純粹に苦情を言いたいのなら、動画を準備する必要はないでしょう。最初から公開するつもりでことを運んだのではないかと勘ぐられても仕方ないと思います。さらには、昨日の土曜日には、「麦ばたけ」では危険ドラッグ入りの酒を飲まされる、と事実無根の中傷を書いたビラまで作って、駅や商店街を行く人々に配っていたのです。また、ディスラー総統氏のブログに悪乗りして、商店街で威圧的に罵声をあげながらお客さんたちを怖がらせている若者グループもいました。すぐに警察が追い払ったので、商店街の安全は守られています。

私の言い分に疑念を覚える方は、松保神社交番の村井巡查に経緯をお尋ねください。また、私のお店に来ていただければ、私もお話しいたします。それで、私がどんな人間か、見極めてください。

同じことが何度起ころうとも、私は同じ態度を取ります。たとえお客様であっても、間違った要求やクレームや暴力には、絶対に屈しません。不公正なクレームや暴力には、断固として反論します。それが、卑怯な暴力をストップし、また威圧的な要求に対して自分たちが卑屈にならずに堂々と拒否できるようになる、最良にして最短の道だと私は信じています。これをお読みの皆さんも、勇気を持って、卑劣さに立ち向かってください。自分の鬱憤を晴らしたいがためにディスラー総統氏の卑しい中傷の尻馬に乗るような真似は、

控えてほしいです。自分が惨めになりますよ。

私はすでにディスラー総統氏の身元を特定しております。これから、商店組合として告訴する手続きを進める所存です。

麦ばたけ店主 凶領幸吉

異常に興奮し始めた宮門を館沢はなだめすかして、凶領がこの場に顔を出すなり両者が衝突するような事態は、とりあえず免れた。

だが呆れたことに、理事会が始まり、「クレーマー事件の真相」として報告をするにあたって、凶領は自ら、自分のブログのコピーを配布したのである。挑発だとわかっていながら、宮門は噴火を抑えることができなかった。

しかも報告が終わるやいなや、阪辺理事長は次の議題へ移ろうとした。普段は進行を務める事務局長が、この日は当事者のため、理事長が仕切っていた。宮門はすかさず挙手し、指名を待たずに発言した。

「昨日の段階でも、複数の店舗から、経営に支障が出ているとの苦情が寄せられています。こんなあからさまに焚きつけるような対応をしたら、むしろクレーマーからの攻撃を呼び

込んで、状況は悪化するんじゃないですか。だいたい、組合に諮りもしてないのに告訴を検討してるだなんて公表するって、どういう見だ？ この件における図領氏の責任の所も含めて、今後の対応について明確化することを提案します」

「同感！」とすかさず滝鼻さんが加勢してくれる。

「えー、という宮門副理事長からのご提案がありました、いかがでしょうか」理事長が事務的な調子で出席者を見回す。

「では宮門さんは、ことを荒立てないために、連中に好き放題言わせておけとおっしゃるんですか？ そんなことをしたら、それこそ思う壺じゃないですか。ぼくは図領さんの対応に賛成ですよ」

正面切って反論してきたのは、麦ばたけの隣で「蛇ノ目寿司」の板前をしている笹古哲矢<sup>や</sup>だった。先代笹古の入り婿で、図領のアドバイスを受けて店舗を改修し、サービスにも新機軸を導入したところ、食ベログでの評価が3・5を超え、投稿数も増え、収益が目覚ましく伸びたと言われていた。以来、図領を積極的に支持している。

「誰もそんなことは言っていない。事実はこうでしたって、淡々と書けばいいじゃないですか。おかしなことを言う客には毅然とした態度を取るとか、もしもない告訴をするだとか公言して、余計な挑発をしなくていいんです。実際には、理不尽な要求を断ることがあつ



てもいいとは思いますが、暴力さえ振るわなければ。でも、わざわざ宣言する必要はないんです。おまえはクレマーだって、名指ししてるようなもんじゃない。だから相手も引くに引けなくなるんです」

「俺らの若えころだったら、そんな考え方は敗北主義だつて、批判されたな。なあ、宮ちゃんよう」と「花房靴店」の主の英太郎はなぶさたろうが言った。

「エーターローと違つて、ぼくは学生運動には手を出してないんでね」

宮門は、家業を継ぐのに大学なんて出る必要はない、と言う父親を説得して進学させてもらった以上、学生運動なんてハシカみたいなものにかかつてる暇はないと無視してきたし、時代が下つてそれが正しかったことが証明されたと思つている。エーターローと「松保花壇」の芳倉諒子よしむらさきは学生運動にのめり込んだクチだから、凶領がよく口にする「改革」とかいう言葉に弱いんだ、と、宮門は苦々しく思つた。案の定、宮門の内心が聞こえたかのように、芳倉が「事大主義じゃあ滅亡するつて、まだわからないかなあ」と言った。

「何でもいいけど、お客さんが戻つてくれるかどうか、でしょう？ 私も副理事長と同じで、これではかえつていたずらをエスカレートさせるようなもので、お客さんをさらに遠ざけちゃうという、副理事長のご意見に賛成です」

滝鼻さんが、議論を本筋に戻してくれる。

「事務局長だって、わかってるんですよ」と宮門は補足する。「昨日の晩、この件でぼくは事務局長とサシで話し合いました。ですよね？」

宮門が同意を求めると、図領は首を縦に振った。

「そのときに、今みたいなことを忠告したんです。刺激したら逆効果だって。そのとき事務局長は、重々承知してます、って同意したんだよ？　だから慎重になってくれると思うたのに、何ですか、この文章は」

宮門は最後を激高するように言い、左手に持ったブログのプリントアウトを右手の甲でぱしぱしとほいた。

「ですから、約束は守りました」場の空気を変えようとしたのか、図領は妙にのんびりのほほんとした調子で言い返した。「私はディスラー総統氏を誹謗中傷したりしないように細心の注意を払いました。書いた内容は事実だけだし、余計な色もつけてません。告訴云々は、これでディスラー総統氏の意気をくじくことができるから、表明しました」

「それが挑発だって言ってるんだよ！」

「それはあくまでも副理事長のお考えであって、私は必ずしもそう思いませんけど」

「まあ、これ以上議論しても、あとは売り言葉に買い言葉になるだけですから、もうよしときましよう」と理事長の仕切りが入る。「仮に本当に訴えるとなった場合、その準備は

できてるんでしような？ 事務局長のほうで全責任を負えるんでしような？」と理事長は確認し、凶領はうなずき「そのために警察を呼んだわけですから」と答えた。

「それなら結構。事務局長の打った手が吉と出るか凶と出るか、こればかりは実際を見ないとわかりません。ただ、凶と出た場合でも、われわれが明日にでも店を畳まざるを得ないような窮地に追い込まれるわけではありませんから、様子を見てからその結果次第でまた考えるので十分でしょう。何もしてないわけじゃなく、手は打ったわけですから。いかがでしょう？」

理事長の言葉は、これで打ち切りにするぞという強制力を言外におわせていたが、宮門は食い下がった。

「ぼくは甘いと思いますがね、理事長がそうまでおっしゃるのであれば、異論はありません。ただし、いつまで様子を見るのか、そのときに凶と出ていたら、今回の措置を独断でとった事務局長の責任はどうなるのか、そこははっきりさせておくべきだと思います」

「凶と出たら、それはそれですぐわかるんじゃないですか」と「文具と本の彩文堂」店主、仁川林平にかわりんべいが言った。

「曖昧はよくないような気がします」館沢が控えめに意見する。

「では、来月の定例理事会まででどうですか。もちろん、閑古鳥状態が一週間も続くとい

った緊急事態が生じれば、そのかぎりじゃありません。臨時の総会を開くなど、迅速柔軟に対応していきたいと思えます。異論はございますか？」

口を閉じろという圧力だったが、宮門はひと言付け加えずにはいらなかった。

「そういった悪化のほうへ転がった場合は、理事会の体制を変えるぐらい思い切った対応をしていかないと、乗りきれないと思えます。そういう可能性だつてあることを、理事のみならず、商店組合のメンバー全員に意識してもらつて、ことに当たつてほしいと思えます」

失敗したら凶領の失脚を含め、理事会の改選を臨時に行うことを、商店街のみんなに言いふらすからな、という宮門の宣告だつた。